

ある。

本書は先づ前三章に於いて、遺跡の研究史、其の歴史地理學的、地形學的考察及び遺跡の一般的状態を記述し、第四章に於いては、出土せる豊富なる彌生式土器を五型式に分類して詳細に記載してゐる。そして第五章では、本遺跡の出土例によつて始めて内容を明にした彌生式土器の彩文、原始繪畫、記號的文様に就いて論述し、また挿描文に依る五型式の土器の通觀を試み、終りに此等の五型式の土器は併存したのではなく、各々時期を異にして繼起したといふ推斷を下してゐる。一體、近畿地方に出土する彌生式土器に、形式學的に聯關する五形式の存することは、既に知見に上つてゐた處であつたが、本遺跡に於いて注目すべきは、遺跡を構成する堅穴及び遺物包含地より各形式が純粹に出土する例が多い事實である。かくして該五形式が一時代に併存したのではなく、實に其等は彌生式土器の系統的發展の序列として時期的に把握されるべきことが解明されたのである。

木器類及び植物製品の裕さは、本遺跡の價値をいたく昂めたものであるが、其等の記載に充てられた第六章に於いては、木器と土器との形態的交流や木製農耕具の高度な發達が強調され、土器について夥しく出土した石器の記述が試みられてゐる第七章では、時期によつて石器の材料に差異のある事實が指摘されてゐる。第八章では土製品及び骨角牙製品を叙べ、第九章では、生物學的、林學的研究を基礎として自然遺物を記述し、更に當代人の生活と遺跡の様相にまで論觸してゐる。殊に、家畜や栽培植物の問題は、

著者等の最も留意する所となつてゐる。第十章は後論として總括に充てられ、先づ遺跡の一般的性質、住居用と貯藏用の堅穴の存する事實、及び高床家屋の發生等を叙べ、ついで用途による土器の分化發達、木工術の驚くべき發達、罎の存在、金屬利器の存否等を論述され、最後に該遺跡から少量出土した繩文式土器に依つて、彌生式土器と其れとが場所を異にして時間的に併存したことを説いてゐる。

以上は、本書の概要に過ぎないが、豊富かつ貴重な遺物を學界に贈つた唐古遺跡が、本書の如き精細なる報告書を俟つて始めて點睛の美をなしたことは言ふまでもないのである。實に本遺跡によつて、吾人の彌生式文化に關する知見は、其の内容の深さと廣さを著しく加へたのであつて、本書こそはかゝる彌生式文化の寶庫に、吾々を導入せしめるものである。然も著者等は、叙上の如き裕かな遺物を前にしながらも、あくまで事物に即して論述し、聊も議論の逸脱を許さぬのであつて、かやうな慎重な態度は、創意に富んだ報告技術と共に、本書をして學界の指標たらしめてゐるのである。(續四六倍版。卷首圖版一葉。本文二五二頁。圖版一〇八葉。桑名文星堂發行。定價參拾圓。) (角田文衛)

東方文化研究所研究報告第十七冊

古代支那工藝史に於ける帶鉤の研究

長 廣 敏 雄

最近の支那考古學研究は支那古銅器に於て周樣式・漢樣式を分

類し、更に戰國樣式(秦樣式)を區別して夫々の「型」を抽出設定し得たのである。

本書の著者は、「この型は無精神のものであらうか。さうでは無いのである」と言はれる。さうした「型」に對する技術的・唯物的見解にとゞまることなく「型」―技術―を超えた藝術意欲の作用に問題の焦點を求められたのである。而もそこに時代を問題にし民族を問題にされたのである。著者長廣氏の書かれたものが常に問題を提示される所以と思ふ。

長廣氏の書かれたものを讀むと支那考古學に關心をもつてゐる者には深い反省が興へられる。支那考古學は歴史考古學にこそ問題の重點が存することは斷言できよう。横への單なる唯物的な自然科學的な擴がりを避けて支那精神の理解といふ點に問題を深く掘り下げようとする場合、先史考古學には底の見えた限界の存することを如何ともし難い。私は支那精神の深い理解を問題とするが故に歴史考古學にこそ問題の重點が存するといふことをしじみみ思ふのである。

かくて支那の歴史考古學を研究の對象とする場合、從來云々ざれ來つた文獻か遺物かは長廣氏の書かれたものを讀む度に私はいつもさう思ふのであるが眞の問題ではなくなつて來る。文獻成立の背後にあるもの遺物成立の背後にあるものともに共通した一つの世界を豫想せしめるからである。といふことは私は支那の歴史考古學を研究する場合文獻か遺物か何れかに偏するには、支那古代世界はあまりにも宗教的であり倫理的であり象徴的であると

思ふが故である。

著者は本書に於いてまづ帶鉤の「型」を分類され、この分類によつて明らかに實用的でないもの、存在を見出されてその裝飾意匠を考察される。次に出土地の判明したものにより時代の一つの基準が求められてゐる。更に工藝史上の一般樣式と帶鉤の關係が述べられ、帶鉤が周漢時代の社會生活にもつづいたものであり帶鉤の文化史的意義が論ぜられる。そして最後は周漢美術の背景として古代支那工藝精神―抽象性―が極めて明快に結論されてゐる。

一 小工藝品にすぎない帶鉤の研究によりよく周漢時代の思想世界を明らかにし、ひいては支那工藝の基本精神を見出されんとされたものであることを知ることができよう。帶鉤の形式分類からのかゝる深い追究に今更の如く著者の鋭い洞察と豊かな教養と深い學問的落つきとを羨しくさへ思ふのである。(澄田正一)

彙報

昭和十八年十月史學科講義題目

國史

普通國史概説(第一部) 西田教授 2

國史概説(第二部) 中村助教授 2

特殊國家思想の發達 西田教授 2